
ゴミ箱のスレイプニル

夕雲 橙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴミ箱のスレイプニル

【Nコード】

N7097T

【作者名】

夕雲 橙

【あらすじ】

ある日、登校する途中で主人公の男性が非日常の事件に巻き込まれます。

暗い場所で不思議な女の子と奇妙な生物に出会い、謎掛けのようなお願いをされました。

短編、前半後半の二作で完結です。

1 (前書き)

ご来場ありがとうございます。

このお話は次の2話目で完結します。

どうぞ、読んでみて下さいね。

月曜日の朝、学校に行く前の時間。

僕はゴミ箱から溢れんばかりに山盛りになったゴミを捨てようとしていた。

プラスチック製で円筒計のゴミ箱をひっくり返してゴミ袋に入れる。

昨日、美術の課題で使った紙切れがたっぷりと入っていた。

夜遅くまでホームページの更新をして、何度も絵を書き直した。

上手くいかず、何度も修正、上書きをしまいには削除した。

最期はどこまで書き直したのか、収集がつかなくなり書置きの整理整頓まで行った。

そんなことをしていたから、課題の絵に取り掛かるのが遅れて夜更かしした。

時間ギリギリに起きた僕はゴミ箱を叩く。

細切れになった紙切れはお互いに絡まりあい、ゴミ箱の中で引っかかり落ちなかった。

僕は逆さにしたゴミ箱の中に手を突っ込み、引っ張って流すようにゴミ袋に入れる。

腕に短冊が繋がったような紙切れが付いていた。

紙切れを払い落とすと、着替えて学校へと向かった。

昨日は雨が降った。

学校に向かう途中、朝日が反射するまだ乾いていない道の途中で足を止めた。

丸いマンホールの蓋がずれて、細い線のような雨水が隙間から流れ込んでいた。

重そうな金属の蓋が持ち上がり、斜めに傾いている。

足を引っ掛けそうになった僕は蓋の端を踏んで押し込もうとした。

妙な具合に引つかかった蓋は踏んでも動かない。

放置しておこうかどうか数秒考える、僕は蓋の端にゆっくりと指を当てる。

ずっと閉まったままの蓋、引くと出る取っ手が錆びて動かない。

蓋の見えない場所には、長年積み重なった得体のしれない苔やどろっとしたものが付いてそうで、僕は触るのが嫌だった。そっと湿って冷たい金属をなぞる、縁の固い手触り。

大丈夫そうだ、僕は少し指を伸ばした。

両手で蓋を持ち上げて、ずらそうとした時だった。

下から声が聞こえた、女の子の声が。

「あの、何をしていますか」

僕は蓋に両手をかけた無防備な姿のまま、一瞬の間思考が止まった。

驚きのあまり後ろを振り返る。

声は下から聞こえた気がしたが、地面の下に人がいる筈はない。

マンホールの蓋を持ち上げて不審な行動をしている僕に、通りすがりの誰かが声を掛けたのだと思ったからだ。

僕の背中越しには誰もいなかった。

近所の家の中からもかもしれない……頭を左右に振り近隣の家を見渡す。窓が開いている家も、敷地から覗く人物もいなかった。

無人の道が何となく怖かった。

学校の怪談とか、夏休みに観た恐怖番組を思い出して背筋が寒く、緊張で体が強張った。

蓋を持ったままの手にはっとして気づく、この下に何かがあるとしたら、得体の知れない何かの蓋を開けてしまったのかもしれない。とつさに両手を引こうとした僕は、蓋の隙間からこちらを覗く二つの細長い光と目が合う。

声にならない叫びを発し息を詰まらせた僕を、二つの光は何度か点滅してじっと見ている。

瞬きした……眼だ。しかも人間だ。
僕が手をひく前に、その上から小さな指が重ねられた。

「あの、聞こえていたらお願いがあるのです」
声は蓋の隙間から聞こえた。さつきと同じ可愛らしい女の子の声。
声に合わせて光る眼がわずかに揺れる。

不可解な状況で可愛らしい声が、より一層の不気味さを演出していた。

ここで返事をすれば死の世界に連れて行かれる、もしくは謎を問
いかけられて答えられないと魂を抜かれるとか。

記憶にあるホラー物の話が頭をよぎり、僕は声も出せず動けなくな
った。

僕の手上添えられた指がぎゅっと、僕の人差し指を握った。
暖かくて柔らかい指だった。

「お願いがあるのです、聞いてください。創造の指を持つお方」
蓋の隙間に見える瞳が真摯な眼差しでこちらを見つめる、僕は返
事をしない。

返事どころか、声を出していいのか逃げるべきか、両手を引き抜
いたら呪いでも掛けられそうで動けなかった。

蓋がずれた。

重たい金属が僅かに持ち上がり、揺れて動き隙間を広げた。

薄い日光が差し込む穴の中、肌色の皮膚が見えた。

いよいよ僕が悲鳴を上げようとした。

優しく僕の手を掴んだ、細くて小さな爪の生えた指が、そっと力
ーテンを下すように僕を暗闇へと引き込んだ。

とても優しいのに、僕は全く抵抗できなかった。

死にたくない　　こんな場所で一人　　何でもするから
助けて

僕が暗闇の中で想ったのはそれだけだ、後ろで金属の蓋が閉まる

音が聞こえた。

僕は暗い下水道の中に座っていた。

座ってなお首を曲げないと頭が天井にぶつかる狭い空間。

湿ったカビ臭い空気は冷たい。ゆっくりとうねる波のように僕の体と心を冷やす。

前に突いた両手には固い床、流れる水が僕の指と手首あたりで分かれて支流を作り、僕の後ろで合流して本流になる。水がどこまでも流れる、どこまでも続く。

僕の前には、暗い中でも何故かそれだけ視える白い毛の生えた、ゆっくりと動く横長の物体……恐らくは生き物。

その物体に両手を重ね、膝を突いて体を預ける全身が肌色の……服を着ていない女の子。

女の子は体を隠そうとせず、横たわる白い生き物の全身の毛をさすり、声を掛けていた。

「大丈夫……スレイプニル」

僕は怖かった、それにこちらを意識しないすべすべの背中と丸いお尻に対し、目のやり所に困った。

女性は嫌いじゃない、むしろ好きだ。だけど、あからさまに見せられると、こちらが狼狽えてしまう。

スレイプニルと呼ばれた生き物は弱っているようだ。

巨体を横たわせたまま動かず、呼吸をしているのか体をかすかに膨らませて苦しげな音を発していた。

喉がむず痒くなるようなビヒューという、破れた風船から空気が漏れるような息が聞こえる。

僕はどうしたらいいか分からなかった。

なるべく女の子の体を見ないように目の端で様子を伺っていると、女の子はスレイプニルの呼吸が楽になるように、両手で一生懸命に背中らしき箇所をさすっている。

白い動物が頭を振る、一抱えはある細長い頭に生えたたてがみが炎のように舞う。

太い柱のような首にも、人間ならば見事な長髪の白い毛が頭頂部から背中に沿って生えている。

座った馬のような姿をしている。

長い毛の中に手を入れた女の子は、首を両手で抱えるようにさすり、小声でしきりに話しかけていた。

この暗くて狭い洞窟のような下水道に引き込まれた僕を尻目に、スレイプニルの呼吸が落ち着くまですっと、その小さな手で何度も何度も撫でていた。

白い正体不明な生き物の呼吸が落ち着いたのか、ようやく女の子は手を離し僕を見た。

僕は女の子とスレイプニルに見とれてしまっていた、正面向きになった女の子から僕は慌てて目を逸らす。

1 (後書き)

シヨートにするつもりが、少し長くなってしまいました。
ご意見ご感想をお待ちしています。

2 (前書き)

この回で終わります。

少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

どう考えても非日常的な光景だ。

架空の生物のような生き物と、暗闇で真っ裸な女の子。

立ち振る舞いからして、向こうは服を着てないことなど気にしていない。

僕が照れるように目を逸らしたのは、この場所で女の子の機嫌を損ねたくないのと、もしこのまま恐ろしい目に逢ったり殺されたりしたら、いやらしい奴という一方的な印象を最期に残すことになる。突然の状況に全く対応できていない僕にも、最低限のプライドはあった。

「あなたは、どうして破棄したのですか」

こちらを真っ直ぐに見つめた女の子が問いかける。

「できれば、今すぐにでもスレイプニルの体を返して欲しいのです」
質問に答えられない僕をさらに混乱に陥れる、理解不能な言葉を投げる。

「あんなに上手に造っていたのに、どうしてそんなに残酷なことをしたのですか」

女の子は僕に一方的に問いかけ、返事を待つ。

僕は質問の意味すら分らない。

「言語はあっていますか、この国の言語を使用しているつもりです」
今度の質問には答えられる、僕は頷いた。

「これはあなたがやったのですね」

女の子はスレイプニルの白い毛に覆われた胴体の下に手を入れ、毛を掻き分ける。

そつと大事なものを運ぶ手つきで、太くて丸く短い動物の一部を持ち上げた。

白い毛に覆われた丸太は、胴体に繋がる根元近くで丸太のような

断面を露にしていた。

「八の足をもつ空駆ける軍馬、その姿は雄雄しく世界を一日で跨ぐ最高のもの」

さらにスレイプニルの胴体の毛を持ち上げる、胴体の下にある不気味な断面は八つあった。

「あなたは人間ですが、私たちを呼びました。複雑な唱文と文様、そして道が開ける時期と言語と場所を合致させて」

一体、女の子は何を言い出すのだろう。

僕はここから一刻でも早く、今すぐにも逃げ出すべきではないのか。

女の子とスレイプニルから怖さや悪意を感じない、だから行動を起こすのが遅れた。

汚れた場所、汚水が集まる下水道の中でさえ、静謐な雰囲気を感じているからだ。

限りなく薄い硝子の芸術品が飾ってあるように、うかつに触れたり壊したりしてはいけないものだ。

だが逆に、異常で不気味な光景だともとれる。

形容できない美しさがそこから生まれていた、それに見惚れてしまった。

「あの、聞いていますか」

僕は聞いていると何度も首を前に傾ける。

「スレイプニルが跳べなくなりました。次の朝日が昇るまでに治さなければ、私は次のスタンザに移動できず消滅してしまいます。私が消滅すれば導きを失ったスレイプニルは暴走します」

女の子の説明で幾つか理解できない箇所があったが、大体の流れは推測できた。

それが僕とどう関係があるのだろうか。

じっと僕を見つめる女の子の瞳が何度か瞬きし、悲しそうに睫を

伏せた。

「結果は偶然かもしれませんが、ですが、あなたはスレイプニルを捉え破棄したのです」

僕は驚いて何から問い返していいのか、口を開けかけたまま、思考が混乱して固まっていた。

「あるはずです、古来より儀式には文字と数字が使われてきました、陣は視覚的な情報です。その情報を残すものを探してみてください」
女の子はスレイプニルの体を両手いっぱい抱きしめ、頬ずりしながら僕に話す。

「まだ今なら間に合います。破棄した場所から回収し、それを元の場所に戻すか……戻すのが無理でも保持しておいて下さい。お願いします」

僕が何かをしたと言うが呪文も儀式も出来ない。
そもそも、そんな知識は持っていない。

「記録……破棄……この二つが伝えられる言葉です。明朝までに探して下さい、現代の魔術を知るあなたには、きっと難しくない筈です」

いつしか女の子の姿を見慣れていたのか、お互いに正面を向いて考える。

僕は魔術なんて使えない、女の子が何か勘違いをしているとしか思えない。

「いいえ、現代では多くの人が、そうと意識せずに使う手段です。ここから出します。ですが、見つからない場合は代償を払って頂きます」

困ったことになった。

これは謎掛けをして答えられないと殺されるパターンのようだ。

今は全く怖くないが、明日の朝までに答えを出さないと、きっともの凄く恐ろしいことが起きるのだろう。

僕は立ち上がることも出来ない、狭くて暗い下水道を去る前に、一つだけとても聞きたいことがあった。

女の子はそれに快く答えてくれた。

「見えるものが全てではありません。私はスタンザの一部です、バルドルへの道の一ページです。名前はありますが、便宜上スタンザと呼んで下さい」

名前がスタンザ……あとはやはり理解不能だった。

僕は気がつくまで道に立っていた。

マンホールの蓋はしっかりと穴に納まり閉まっていた。道が乾いている。

明るさは変わらないが、携帯を出すと時刻は夕方になっていた。学校を一日さぼったことになる。

家に帰る、着替える、軽い食事をしてから考える。

夢でも見ていたのだろうか。

だが、あの下水道に引き込まれた感覚、それにスタンザとスレイプニルはあまりにも存在感があった。

僕がスレイプニルの足を切ったらしい、何らかの呪術的なことをしたから。

どういうことだ、僕は自分の部屋で考える。

昨日は朝起きて学校に行った。

授業内容を一限目から思い起こす。美術系の学校に通っているが、校内で授業中にそのような行為に及ぶだろうか。

静物のデッサン画の下書きを終えた、課題の本を買った。どうだろう、黒線と紙は呪術に関係があるのだろうか。

学科試験の事前テストを行った、僕はB判定だ　文字と数字を使うが、クラス全員が書いている。僕だけに関係があるのだろうか。特定の間違いが偶然呪文に……まさか。

帰りにコンビニに寄り、立ち読みをして友達を話をしてから遅い時間に帰った　多分これは無関係だろう。自分の行動ながら時間を無駄にした。

食事をして風呂に入る、テレビを観る　日常生活だ、ここは呪術的な関わりが薄い気がする。

パソコンで自分のホームページを更新した、デザインを変更したかったので描きかけの背景を仕上げる。何度もやり直して時間が掛かった　文字と数字と言っていた、主にいじったのは絵だ。関係あるかもしれないが、パソコンは捨てていない。

ツイッターにコメントを残し、友達が書いて載せた小説のサイトを覗いて一言書き込んだ　これなら文字と数字を打ち込んだが、他人のサイトだ、どうも違う気がする。

寝る前に課題の作品を仕上げた。描き上げた油絵に切り絵を貼り付け、立体的に見せる作品だ　最も手数が多かったが、使ったのは紙と鋏と糊だ。しかし、最も近い気がする。

僕は考えながら、気になった単語を調べたいのでパソコンを起動させる。最近立ち上がりが遅くなったので待つ間に頭を整理する。記録と破棄。

記録とは書き写す、覚える、後に残すことだ。破棄とは文字通り

捨てる意味だろう。

数分経過してやっと普通に動くようになったパソコンで、検索サイトを表示させ文字を打ち込んだ。

『スタンザ』 ・長い詩を構成する数行単位を主に表す。

表示されたのは車や会社の掲載が多かったが、言葉の流れとしてこれが女の子に言っていた意味だろう。続いて、もう一つの単語を検索する。

『スレイブニル』 ・北欧神話に登場する八本足の馬。

こちらにも会社や商品で同名の物が多かった、同名のソフトまであるらしい。

それよりも古い絵の画像が当たりだろう。

これが横たわる白い生き物の名前に関係している筈だ。イラストの足を切り取り、小さく寝かせればあの姿になるのか。

調べて分かったものの、それからどうしようもなかった。

最も期待していたスタンザの画像も何度かサイトや文字を変えて調べたけど、関係ないものばかりでさらに僕の頭脳は混乱した。パソコンに例えれば、そろそろ設定を変えてクリーンアップしないといけない、重くて動かない状況だ。

一旦、ここまで知り得た情報でまとめてみる。

長い詩の一部が足を切られた北欧神話の馬を介抱して、一介の学生である僕に助けるよう頼む。

……どうして？

椅子の背もたれに思いつきもたれて考え込む。

覚えはないけど、無くした足はどこかに僕が捨てたことになっている、らしい。

捨てるといえば、ゴミ箱。

何気なく視線を落としたゴミ箱には、紙切れが数枚残っていた。

そういえば、結構な量の切れ端を捨てた。朝方は急いでいたから、綺麗に捨てたつもりでも捨てきれていなかったらしい。

僕は椅子から飛び起きると、母親にゴミを捨てたか問い詰める。

朝、ゴミ袋を部屋に置いたまま出していなかったのも、ゴミ出しの時間に間に合わず、家の裏に置いてあった。

ゴミ袋を部屋に持ち込み、中を漁る。

花が散ったような様々な色と形の紙、所々に薄く記入した数字と線。

魚の骨のような形、三角形、四角形、細長く曲がった切れ端。

僕はそれらを小さな袋に入れた、これでいい筈だ。

紙切れをどうしていいのか分からないが、僕は小さな袋を枕元に置いて寝ることにした。

夢を見た。

僕はスタンザを夢に視るまで意識していた。

近づきたい、声を掛けたいのだが、どうしても間にスレイプニルが入って邪魔をする。

夢で観たスレイプニルは座っていたが、僕の倍は大きかった。

スレイプニルの横を回り込むが、どうしても手が届かない。

もどかしい想いのまま目が覚めた。

「おはよう」

目の前にスタンザがいた。

僕は足の無い馬になっていた。

「どうして見つけてくれなかったの」

答えが違っていたらしい、僕は失敗したのか。

「残念ですが、あなたの体で還してもらいました。あなたはこのお話の中で、スレイプニルの失った部分を補います」

僕はどうやら、このままでずっと暮らすようだ。

「何も無い、誰かがスレイプニルを解き放つ奇跡が起きない限り、永遠に出られない世界。あなたには世界を駆ける足が無い。居るのは私だけです」

スタンザが悲しそうに視線を落として、か細い声で話す。

彼女を寂しからせてしまった、スレイプニルと分かれて永遠にこんな場所に閉じ込めさせたからだろう。

僕がいる、僕は間違えたけど君となら……

スタンザは驚き、困ったような顔をした。

2 (後書き)

あなたの画面にも小さな創造がいっぱいです。

読んで頂いて有難うございました。

少しでも面白いと思って腹の足しになるといいです。

あまり書かない傾向の作品なので、書き終えてから読み直して自分で自分がちよつと不思議に思えました。

ショートの投稿で書こうかと思ったのですが、長くなってしまった作品です。

ご意見、ご感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7097t/>

ゴミ箱のスレイプニル

2011年10月4日03時32分発行